

第142回

元ロカビリー歌手たちが遺した  
個性的でシニールな作品集

『島唄』の作者として知られるシンガーソングライター、宮沢和史の長男・宮沢氷魚が、先月終了したNHKの朝ドラ『エール』にロカビリー歌手役として出演していました。

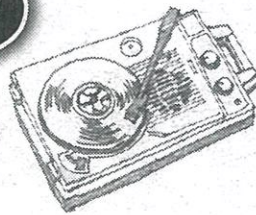
『エール』の主人公のモデルとなったのは古閑裕而ですが、ドラマ自体はフィクションなので、宮沢氷魚が演じたロカビリー歌手「霧島アキラ」も、平尾昌章や『湖愁』の松島アキラ、平尾作曲の布施明『霧の摩周湖』などをイメージして合成した架空の人物でしょう。宮沢がクォーターと

いうことで出自がミッキー・カーチスを、風貌は少しだけ山下敬二郎を思わせてくれました。現役ソングライターの長男が60年ほど前に人気を集めたロカビリー歌手を演じるというのには興味深いものがあります。現実の歌謡界では、前述の平尾をはじめ、ロカビリー歌手から作曲家に転身するケースがいくつもあり、レコード会社専属の既存の作家とはまた違った彩りを昭和歌謡に添えてくれました。

作曲家・平尾昌晃は、布施明を介してロカビリーの残滓を思わせる絶叫調のカンツォーネ歌謡を開拓する

名曲カルテ

昭和歌謡と  
いつまでも



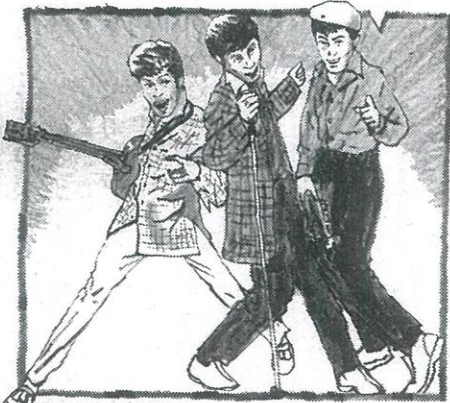
堀井六郎  
絵・松本浦

とともに、小柳ルミ子『わたしの城下町』から始まるふるさと歌謡を世に広め、大成しなかった元ロカビリアンの曾根幸明は『夢は夜ひらく』で名を残します。

美川鯛二の芸名を捨てた中村泰士は、『喝采』（ちあきなおみ）、『北酒場』（細川たかし）でレコード大賞を受賞、『愛は傷つきやすく』（ヒデとロザンナ）、『わたしの青い鳥』（桜田淳子）など、演歌から歌謡ポップス、アイドルソングまで幅広くヒット曲を量産し、歌謡界にその名を響かせます。さらにワゴン・マスタースに在籍していた佐々木勉（『星に祈りを』『別れでも好きな人』を作詞作曲）なども歌謡界に大きく貢献しますが、中でも特に個性的な作品集で知られたのが、前回『あなたのブルース』の作者としてご紹介した藤本卓也です。

五木ひろし『待っている女』、クール・ファイブ『愛の旅路を』等は作曲のみの提供ですが、藤本の真骨頂は作詞作曲にありました。

矢吹健『蒸発の



ブルース』、西郷輝彦『ローリング・ストーンズは来なかった』、林和也『君が欲しい』、カバールされる機会の多い『まぼろしのブルース』などで、一度耳にしたら忘れられない絶叫唱法とシニール感を湛えた『怨念歌詞』で昭和40年代の歌謡界に挑みます。

ロカビリー時代の藤本は「柚木公一」の名前でエルヴィス・プレスリー初期のロックンロールナンバーを得意にしていました。残っている音源は比較のおだやかな発声ですが、当時のロカビリアンとしては、かなりしっかりとエルヴィスのボーカルスタイルをコピーしています。『あなたのブルース』『うしろ姿』などにおける絶叫調の「ああああー」は、ロカビリーと黒人R&Bを換骨奪胎し、藤本独自のスタイルで歌謡曲に導入したものでした。

蛇足ですが、エロティック歌謡かと思わせる操洋子の『お願い入れて』なども、熱狂的なファンから「夜のワグナー」の敬称を授かる藤本らしい珍品です（男の自宅を訪れ、部屋に入れてください、というお話です）。